

はじめに

2020年初頭より急速な拡大傾向にあるデジタルトランスフォーメーション(Dx)の潮流は、保健医療分野にも例外なく押し寄せている。それに伴い、国民が自身の健康情報に携帯端末から気軽にアクセス・管理する世界はすぐ眼下に迫っており、個人の特定健診情報をマイナーポータルで閲覧する体制整備が進められている。このような中、循環器疾患予防を目的とした個人・集団の健康情報の有効活用を考えることは喫緊の課題である。また現下の健康を取り巻く環境の変化は、臨床医学における精密医療(Precision Medicine)の流れとも呼応しデジタルヘルスという新分野を創出しているが、現在、予防医学分野における個人健康情報の利活用についても真摯な議論が求められている。

これら時代の流れをうけ循環器疾患のリスク因子の評価では、ベースライン時の測定値の評価だけでなく、健康情報として蓄積された経年的なリスク因子の推移・変動が循環器疾患発症・死亡にどう影響するか、といった観点から検討が重要性を増しており、その検討を支える方法論、そして頑健な方法論に基づいた研究成果が求められている。わが国の循環器疫学の分野ではこれまで多くのコホートから世界的に誇れる研究成果が発信されてきたが、それらコホートの統合研究である EPOCH-JAPAN(Evidence for Cardiovascular Prevention From Observational Cohorts in Japan)からは、これまで個人および集団における将来的な循環器疾患のリスク評価が国内外に発信されてきた。本研究班は EPOCH-JAPAN の継承班として、今までの成果をさらに発展させ、循環器疾患の生涯にわたるリスクについて、危険因子の変動や予測可能期間に着目し、より精緻な予測可能なツールを開発することを目的とするものである。本報告書は初年度の研究成果を示すものであるが、さらに本研究では先行研究班から引き続いて、わが国の質の高いコホート研究の統合研究・個別研究を推進した。統合研究では大規模データベースの強みを生かし、コホート単独では検証できない課題に対し、リスク因子の組み合わせや詳細な年齢別検討を実施した。

アジア・太平洋地域における最大規模の循環器コホートデータベースを利用し、国内外の著名学術雑誌に発表された本研究班のエビデンスは、日本人集団における貴重な研究成果であり、わが国の知的財産といえる。この大規模データベースを用い、日本を代表する疫学研究を牽引する諸学者により展開される本研究成果をもとに、わが国において更なるエビデンス構築が行われることを期待する。

研究代表者

東邦大学医学部社会医学講座医療統計学分野

教授 村上 義孝

令和4年3月31日